

標題につられて一通り読んでみた。編者の三橋教授には、既に、薬剤と耐性、薬剤耐性エピゾームと耐性因子などの著書があり、この方面の第一人者であることは人のよく知るところである。耐性ブドウ球菌研究会、耐性赤痢研究会、グラム陰性桿菌研究会など、十数年にわたる研究会を通して、集められた豊富な資料と精力的な労作のあとが、人並すぐれた思考力によって見事に結晶したようである。たとえば構成的耐性、人工的耐性のような、多少難解な表現が散見するが、耐性遺伝学そのものが新しい領域だから、これはやむをえない。

耐性の概念が Kossikoff によって始められたのが1887年というから、ずいぶん古い歴史をもっているが、臨床上問題となったのは、選択的な抗菌力の著しい抗生物質ができてからで、1950年から1960年半ばま

□ 書 評 □

「耐性と化学療法」

〔編 集〕

真下啓明 東京大学教授

三橋 進 群馬大学教授

日本大学教授・外科

石 山 俊 次

だが、そのピークであった。従って60年代に、合成ペニシリンが完成されるにつれて、実地上の問題は解決に向ったといえる。しかしこの間に耐性の科学は長足の進歩を遂げて、その伝達や酵素による耐性機構が明らかにされ、新しい物質の開発にま

で応用されるに到った経緯は、本書の記載に明瞭である。ことに、R因子、後にプラスミドやr因子の存在は、著者の独壇場である。

さて本書の執筆者は編者を含めて22名、臨床記載には、多少耐性を離れて、一般化学療法に偏する部分もあるが、いずれも第一線の臨床研究家ばかりである。耐性感染を含めた化学療法の標準的な記述といっても一向に支障はない。特に、菌交代現象や誘導感染、opportunistic infectionのような、宿主側の条件、感染菌と薬剤の関係にまで及ぶ。感染症の化学療法に新しい方向を与えるものとして、編者の配慮は心憎いばかりである。

心ある臨床家はもちろん、研究室にも備えて一読に値する良書といえることができる。

A 5 頁440 図94 ¥9,000 千200
医学書院刊